

太宰府の在村医、中川昌沢の蔵書

江戸時代から代々太宰府の地域医療に尽力してきた中川家には、多くの医学書が残されています。中でも江戸時代のもものが半数以上を占めており、これらは天保期から慶応期(1830~1867年)に当主をつとめた中川昌沢が集めたものです。昌沢の医師としての経歴については、以前この欄で紹介しましたが、その活動を下支えしたのと言えます。江戸時代は、出版文化が花開き、多種多様な読み物が庶民の間にも流通したといわれていますが、まだ高価であったため、人々は自ら書物を書き写して読むこともしていました。昌沢が集めた医学書の中にも、彼自身が書き写したものがあります。



た知識を身につける必要があったのです。

昌沢は、寛政9(1797)年に生まれ、幼少期から18歳まで太宰府で儒学稽古を行い、儒学の中でも実践を重んじる古文辞学派の学問を修めました。医療については、古文辞学の考えを医学に応用した古医方を学びました。昌沢は、実にさかんに稽古を行っています。文政元(1818)年、福岡において3年間の儒学稽古を終えたのち、さらに3年間福岡藩医のもとで医療を学びました。一度太宰府に戻って医療に携わり、文政8年から京都に遊学し5年間の医療稽古を積みました。儒学と医療の稽古期間を合わせると11年もの間故郷を離れて修行に励んだのです。

また、江戸時代の医学書は漢文で記されており、昌沢には漢籍を理解する能力、つまり儒学の素養があつたことが分かります。これは、江戸時代後期の医師にとって重要なことでした。現在のよな医師の免許制度がなかった時代には、薬草の知識や簡単な処方箋の心得があるだけで医師として活動している者がいましたが、やがて福岡藩により儒学の稽古が義務づけられるようになりました。医師として藩に認められるには、漢籍の医学書を読んで書物に記され

中川家に伝わる江戸時代の医学書は、昌沢の意欲的な修行の証しでしょう。彼が研鑽を積んだ古医方に関する医学書が主で、中には京都遊学中に書き写したのものもあります。版本にも昌沢の手になる書き込みが多くなされており、この書き込みも漢文で記されています。太宰府の在村医として活動した中川昌沢の蔵書から、その教養の豊かさを知るとともに、医療の向上につとめた彼の情熱に触れることができるのです。